〔書　評〕

井手至著『遊文録　国語学篇』『遊文録　国語史篇一』『遊文録　国語史篇二』

沖森卓也

一　はじめに

本書は『井手至論文集』全六巻の第二〜四回配本として刊行されたもので、『国語学篇』は国語学史を含み、『国語史篇二』は主として語彙・語法、『国語史篇二』は主として用字・表記法に関する論文を収録している。論文集の他三巻の構成は『萬葉篇一』（既刊）『萬葉篇二』『説話民俗篇』である。いずれもこれまで発表された論文で構成されており、凡例によれば、研究史的意義を尊重して、明らかな誤字や誤認を除いて、あえて全面的な加筆訂正を加えてない由である。ただし、発表後に接した新見などを特に取り入れて、最小限度の補訂を加えた場合もあるとのことである。

評者が研究を志した頃に井手至博士の論文のいくつかに触れ、大いに啓発されたことを思い出す。周到な用例収集、先行研究の整理を踏まえ、緻密な論証に従って穏当な結論を示されているという印象を強く抱いたことはまだ記憶に新しい。この度、博士の国語学に関する学術論文が著作集という形でまとめられたことは斯界にとって誠に有益なことと言わざるをえない。

この三書の多岐にわたる内容については評者にとって疎い方面も多く、書評の任に堪えないことを深く危惧するものであるが、敢えて気づいた点を二三述べて責を塞ぐことを許されたい。

二　『遊文録　国語学篇』

『遊文録　国語学篇』は全六巻の首巻をなすもので、文法理論に関する論考で構成されており、いわば総論篇に相当する。次にその構成を示す。

第一篇　品詞論
　第一章　品詞論の理論
　第二章　品詞論の方法
第二篇　指示詞・形式名詞の機能
　第一章　指示詞の機能
　第二章　形式名詞の機能

第三篇　副用語の機能
第一章　副用語の機能
第二章　連用形と副詞の機能
第四篇　助詞の機能
第一章　対比的限定と特立的限定
第二章「の」(連体語・句) の機能
第五篇　日本文法研究史
第一章　日本文法研究の回顧と展望
第二章　接続詞の研究史
第三章　ク語法の研究史
付篇　副用語研究史資料
一　副用語
二　副詞
三　連体詞
四　接続詞
五　感動詞

第一篇は、品詞論が構文論とは別個に独自の原理で行われるべきことを説いたもので、従来の品詞分類に関する諸説が巧みに整理されている。

第二篇は、指示詞を現場指示と文脈指示に分類し、その機能を文章論的な視点を絡ませて分析した第一章と、形式名詞の非名詞的な性格とその機能を述べ、その範疇表現という特性を指摘した第二章から成る。指示詞に関する研究は著者の年来のテーマの一つでもあり、明解かつ重厚な論考である。

第三篇は、副用語の機能と、連用形および副詞の機能について論じている。その中で、いわゆる陳述の副詞を「陳述副詞」「演述副詞」「叙述副詞」に分けられたのは深い洞察に基づくものである。陳述副詞は願望・意志などの表現と、演述副詞は断定・推量・懐疑などの表現などと、叙述副詞は否定の表現などと呼応することで、それぞれの副詞の文法的性質をとらえ直すべき視点を本書は提示している。ただ、「せめて」は限定副詞ととらえられるべきことや、副詞の中で「あえて」など意志に関わるもの、「既に」などアスペクトに関わるものなどに分類が及んでいない点は、副詞研究の今後の課題であるように思われる。

第四篇は準体助詞、副助詞、係助詞および連体助詞について分析されたものである。対比的限定、特立的限定という視点を導入することで、助詞の分類をグループ化しようとする試みは今後も受け継いでいくべきものであろう。また、「の」が副詞的成分に付く一群のものを考察の対象にされている点は、特に注目される。「の」が付く形容動詞語幹のあり方などを考察する上でも、参考とすべき高論である。

第五篇は変形生成文法に至るまでの文法理論と、接続詞およびク語法に関する研究史を詳説されたもので、これに関連して付録「副用語研究史資料」では、副詞・連体詞・接続詞・感動詞について、諸学説を紹介し、命名の由来を述べるとともに、補説では今

後の課題を指摘されている。いずれも、それぞれの研究分野における基礎的データが網羅されており、最良の参考文献たりえている。

本巻は文法に関する基礎的な論考で構成されており、いずれも論理的かつ整合性に富んでいる。今後発展させるべき課題が随所に散見され、副用語・指示詞など今日的テーマを考究する上で必読の書である。

三 『遊文録 国語史篇二』

『遊文録 国語史篇一』
第一篇 語彙――上代の語彙――
第一章 上代語とその資料
第二章 上代語の種々相
第二篇 名詞――古代の地名――
第一章 古代の地名と上代語
第二章 地形・地勢名詞と地名
第三篇 指示詞
第一章 指示詞の史的考察
第二章 萬葉歌の指示詞
第三章 文脈指示詞と漢文訓読
第四篇 副詞
第一章 「もっとも」の語史
第二章 「せめて」の意味用法の展開
第三章 古代における「つひに」「つひには」
第四章 古代の「つれづれと」と「つれづれに」の相関
第五篇 助動詞・接辞
第一章 上代語「みゆ」の助動詞的性格
第二章 完了の助動詞「つ」と「ぬ」の使いわけ
第三章 打消・断定の助動詞
第四章 終止形接続の「なり」
第五章 萬葉歌のク語法
第六篇 待遇表現――上代の敬語――
第七篇 文・文章
第一章 意味上の文の種類とその史的考察
第二章 和歌散文連接形式の変遷
第三章 文脈指示詞の用態から見た文章
付篇 魏志倭人語の性格
一 北九州の地名
二 倭人語を記録した音訳文字
三 倭人語の子音
四 倭人語の母音と母音調和
五 おわりに

第一篇では、上代語の資料を概説し、語彙としての単位をどのように意識していたかを探り、音節数・意味・語種・位相などによる語彙の分布を分析する。御論文の発表後に発掘された木簡も

今日では数多くあり、本篇の語彙調査に付け加えるべき点もないわけではないが、上代語の語彙に関する概説として適切なものと言えよう。

第二篇は、地名を中心に据え、地形・地勢用語を分析したものである。地形・地勢用語として「にふ」(丹生)をあげるのはやや異質のように思われるが、語源との関係に慎重に配慮する一方、地名から上代語を導き出そうとする強い意欲が感じられる。

第三篇では、コ・ソ・カ(ア)の指示詞の史的変遷を考察する。カはコの母音交替形で、ソは外の意味を表すソ乙類と語源的に関係するという説は説得力がある。そこからカとソの交渉を考察している点は明解である。また、指示詞を現場指示と文脈指示に分類し、前者においては近称が、後者においては中称が多用されることを述べ、コ系・カ系の指示詞における漢文訓読の影響を探っている。現代語の指示詞を考察するためには、このような史的変遷を踏まえておかなければならないだろう。

第四篇は、副詞「もっとも」「せめて」の語史について分析したものと、古代における「つひに」と「つひには」、「つれづれと」と「つれづれに」との関係を考察したものである。このうちで第四章の「つれづれと」「つれづれに」についてみると、本来は「つれづれと」が動作の過程、状態の継続時における様相を表すのに対して、「つれづれに」は動作の完了時、状態の静止時における様相を表すという差異を指摘し、さらに前者は後者よりも早くに口語から姿を消したという変遷を述べる。「さらさらと流す」「さらさらに乾く」という用法上の差異は平安初期まで遡ることを指摘している点は明解で興味深い。仮にその立場に立てば、「―に」と「―と」が対応する他の語でも同様のことが言えるかどうかについても今後論述を期待したいと思う。

第五篇では、「みゆ」の助動詞的性格、完了の「つ」「ぬ」の使い分け、「ず」の語源と活用形の用法、終止「なり」と連体「なり」の断定用法、上代におけるク語法の消長について考察する。なかでも「つ」と「ぬ」に関する論考は視野が広く、従来の説を詳しく吟味している点で、今後もこの考察を踏まえて論議が展開されるべきであろう。

第六篇は上代語の待遇表現について論じたもので、話し手自らを謙遜(自卑)し、他者を尊敬するという心的態度に立脚したものであることを明らかにしている。そして、待遇上の規範が強く作用する場面で、絶対敬語が現れるとされる。

第七篇では、第一章では、話し手の表現意図に基づく文を四類十六種(たとえば「訴え文」として呼掛け文・命令文・勧誘文・聴意文・質疑文)に分類し、その例文を示してそれぞれの史的変遷を明らかにする。第二章は、和歌と散文の連接形式から、物語・日記などの文学ジャンルの質的な相互関係を位置づけるものである。第三章は、文脈指示詞の用いられ方を古典の文章を対象として分析したもので、漢文訓読が文章中の文脈指示詞に影響を与えていることを明らかにする。指示詞研究を文章論に立ち戻らせた高論であると言えよう。

付篇では、魏志倭人伝に所載された語を、上代語との関連で考察したものである。補注で、暁母・匣母がカ行に用いられていることを指摘されている点は貴重である。恐らく、魏志倭人伝の表記は古代朝鮮語の表記体系と何らかの共通性を有するものであり、古代朝鮮漢字音（古韓音）の研究をさらに厳密に解明する必要性を感じさせられる。

四『遊文録　国語史篇二』

『遊文録　国語史篇二』

第一篇　上代の用字と表記法
第一章　上代人の文字意識
第二章　上代の漢字、仮名の用法
第二篇　萬葉集の表記法
第一章　仮名表記される語彙
第二章　正訓漢字表記される語彙
第三篇　萬葉集に見える用字
第一章　掛け詞の源流――縁字の使用
第二章「飛鳥」
第三章「戯奴」
第四章「宿木」
第五章「開木代」
第六章「諸伏」
第七章「潤湿」
第四篇　萬葉集古写本の換え字
第一章　古写本の換え字――表意漢字の場合
第二章　類聚古集の換え字――表音仮名の場合
第五篇　萬葉集古写本の誤字
第一章　誤字説の限界性
第二章「紀之許能暮之」
第三章「和々良葉」
第四章「并人」「水飯合」
付篇　黎明期の漢字使用
一　漢字以前
二　外交と漢字
三　記録と漢字
四　識字層の拡がり

第一篇は上代の表記法全般について論及したもので、特に第二章は上代語表記の概説として有益な論考である。漢字・万葉仮名の諸相を記述するとともに、「表記法」と「用字法」の別や、「字様」と「字態」など、その原理的な側面にも行き届いた配慮がなされている。万葉仮名字母の使用をめぐって対比された朝鮮関係資料に、七世紀以前のもので触れられていない金石文もあるものの、上代表記の全貌が限無く記述されている。

第二篇は、万葉集において仮名表記される語彙と正訓表記される語彙の性格を論じたもので、漢字を用いた表記であるが故の、

表語性（表意性）と表音性との相関関係を見事に整理し論述されている。変体漢文表記諸巻における仮名表記は直接表語性を志向しているという第一章の結論は全く同感である。ただ、語や語基ごとに一定の仮名を用いて記すという表記法（特定表記）が看取されるものの、変体漢文表記諸巻の表記の段階ではそのような固定的な表記が採用されていたと考えてよいのかどうか、人麻呂歌集などの原初的な表記から展開する表記史の上でどのように位置づけられるのか、その点についても言及していただけるとありがたかった。しかし、論旨の骨格は従うべきものであろう。

第三篇では、第一章は上代における掛詞の諸相を解明し、歌の中の他の語句の意味と関係のある仮名を使用した場合や、歌の表記に用いられた他の文字と関係のある仮名を使用しようとした場合を「縁字」ととらえて、掛詞の源流を考察したものである。このような縁字の用法は恐らく漢詩など漢文学の知識に基づくものと見られるが、それと掛詞がどのような関係にあるか興味がそそられる問題である。第二章では「とぶとり」が「あすか」にかかり、「あすか」が「飛鳥」と表記されるのは、土地ぼめに由来することを、第三章では一四六〇番歌の「戯奴」は諧謔的技巧によるもので、その背景には知的な文学サロンが機能していることを指摘する。さらに、第四章では、「さくら」の表記である「佐宿木」における「宿木」が「くら」にあてられるのは、神の宿る木を「くら」と呼んだことによることを、第五章では、木を伐り開く場所を「開木代」と書くことから、これを「やましろ」にあてたことを、第六章では、「諸伏」は枻戯において、皆伏の采は大幅な特権の与えられるものであることから「意のまま」の意で、「まにまに」にあてられたことを論述する。いずれも民俗学的、生活史的な考察を取り入れた巧みな論証である。第七章では、三七〇番歌の「湿潤跡」は「ぬるぬると」と読むべきことを提起する。

第四篇ならびに第五篇は万葉集古写本における換え字（表意的または表音的に対等の漢字で換えて書写すること）と誤写について克明に論及している。本文校訂には欠くことのできない基礎的作業であることが改めて思い知らされる。また、誤字説には限界があることを厳に戒めるとともに、正しい解釈を追究するには新たな誤字説も辞さないという毅然とした態度は、後学の者として見習うべき点である。

付篇として、六世紀以前の漢字使用を、文献資料によってあぶり出そうとされている。今日では墨書土器などの発見が相次いでおり、六世紀以前についても、「額田部臣」というような、訓の使用が確実であるような鉄剣も新たに発掘されている。このような考古学的史料が、文献記述とどのような関係にあるかという視点を持つべきことが示唆されている点は貴重である。

五　おわりに

これらの書は、国語学・国語史学全般に亙る、広い見識と深い洞察力が随所にうかがわれる。そして、その論証の堅実さと視野の広さには学ぶべき点が多い。現段階においては、新たな資料の

発掘や研究によって、異論をはさむ余地もなくはないが、これまでの研究の最高レベルが反映されているものと言えよう。評者の不敏による誤解も多いことを虞れるが、切に御海容を願う次第である。

博士のますますのご健勝を念じつつ、筆をおくこととする。

（『遊文録　国語学篇』　一九九六年九月三〇日発行　和泉書院刊　A5判　三三四ページ　本体価格一二〇〇〇円）

（『遊文録　国語史篇二』　一九九五年三月三一日発行　和泉書院刊　A5判　五〇〇ページ　本体価格一五〇〇〇円）

（『遊文録　国語史篇二』　一九九九年一月一〇日発行　和泉書院刊　A5判　三八〇ページ　本体価格一一五〇〇円）

——立教大学教授——

（二〇〇一年七月一九日　受理）